
びっくりバコ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

びっくりバコ

【Nコード】

N65470

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

犬のコロと猫のチビがお家の中で見つけた箱。その中にあるものが何か調べようとしますが。子供の頃読んだお化けの絵本をヒントにしました。

第一章

びっくりバコ

白犬のコロと三毛猫のチビは。今日の前に大きな箱を見ていました。

そのうえで。びくびくしていました。

「中には何があるのかな」

「そうだよね。何が入っているのかな」

コロとチビはどちらもまだ子供です。それで好奇心旺盛なのです
がそれと同じ位です。子供なのでとても怖がりです。今実際に怖が
っています。

「調べてみる？」

「そうする？」

「けれど。まさか中に」

「そうだよね」

チビは少し震えながらコロに応えます。

「若し怖いものが入っていたら」

「あの黒猫のジョニーがいたらどうしよう」

二人の隣の家のとても大きな黒猫です。いつも子供の二匹に対し
て物凄い顔で威嚇してきて睨んできます。そんな猫なのです。

「そうしたら僕達襲われるよ」

「そうだよね。ジョニーがいたら」

「ジョニーじゃなくても」

チビはさらに話します。

「ほら、あれが出て来たら」

「あれって？」

「怖い人だよ。外にいるだろ？」

「ああ、いるよね」

コロはここで窓の外を見ました。二匹は今二匹のお家の中にいま

す。この箱は二匹の飼い主の一人の男の子のおもちゃなのです。

「一杯ね」

「怖いおじさんとかおばさんとか」

「えっ、この箱の中にいるの？」

「だからいたらどうしよう」

チビが言うのはこのことでした。

「そうだったら」

「そんなの嫌だよ」

コロは怖がる顔でチビに言います。耳が縮こまって前にいつています。

「僕お家の人以外の人皆怖いんだから」

「僕もだよ。パパとママとね」

「男の子と女の子以外はね」

「皆怖いよね」

「うん、怖い」

こうに悲喜で話をします。

「そんな人が中から出て来たか」

「だよねえ。本当に何がいるのかな」

二匹は考えます。そして今度はです。コロが言うのでした。

「若しかしたら」

「若しかしたら？」

「中にはお化けがいるんじゃないの？」

コロはこんなことを言い出しました。

「ひょっとしたら」

「お化けが？」

「うん、男の子や女の子が持つてる絵本の中に出てるじゃない」

「あの足がなくて白いのつぺりしたの？」

「そうだよ。あれが出て来たらどうしよう」

コロは怖がる声でチビに話します。

「それで僕達を連れて行くんだよ」

「連れて行くって?」

「それも誰も知らない遠い遠い世界にだよ」

自分と同じように耳を縮ませて前にやってしまっているチビに対して話します。二人よりもずっと大きい箱を見ながらです。

「パパもママもない世界にね」

「えっ、そんなの嫌だよ」

二匹にとってはこのお家の人間のうちお父さんとお母さんはまさに二匹にとってもお父さんとお母さんです。彼等は自分のことをそれぞれ犬とか猫とかは思っていないのです。

「パパもママもない世界なんて」

「そうだよね。そのお化けが出て来たらどうしよう」

コロは震える声でチビに話します。

「そうだったら」

「じゃあ開けないでおく?」

チビはこうコロに提案しました。

「それだったら」

「けれど中に何かいるよね」

コロはそのチビにまた話します。

第二章

「絶対に」

「そうだよね。若しかしたら」

「若しかしたら?」

「いるんじゃないかあるのかも」

こう話すのでした。

「箱の中にね」

「何があるっていうの?」

「食べ物とか?」

チビは首を傾げさせながらコロに話します。

「そういうのじゃないかな」

「食べ物があるんだ」

「キャットフードあるかな」

チビはこう考えました。

「この中に」

「ドッグフードなのかな」

コロはこうです。

「とびきりの美味しいドッグフードが中に一杯」

「いや、キャットフードだよ」

チビはこう言って引きません。

「それが中にあるんだよ」

「ドッグフードに決まってるよ」

コロも言います。

「絶対にね」

「よし、そこまで言うんならね」

「うん」

「開けてみよう」

チビが言いました。

「それでいいね」
「えっ、けれど開けるっていつても」
「どうしたの？何かあるの？」
「ジョニーか怖い人がいるかも」
「コロはここでこのことを思い出しました。」
「若しかしたら」
「そう考えるの？」
「だってさ。本当に中に何かあるかわからないんだよ」
「それはそうだけれど」
「お化けが出たらどうするの？」
「コロはお化けのことも話に出しました。」
「何処かに連れて行かれるよ」
「けれどキャットフードがあるかも知れないよ」
「チビはこちらを期待しています。」
「中には」
「それかドッグフードが」
「とにかく中に何かあるのかはね」
「わからないよね」
「いや、わかるよ」
「ここでどうコロに言いました。」
「ちゃんとわかるよ」
「わかるってどうして？」
「だからさ。開ければいいんだよ」
「そうすればいいというのです。」
「簡単じゃないか」
「この箱を開けるんだ」
「そう、開けよう」
「またコロに提案します。」
「中に何かあるのか調べる為にもね」
「ううん、そうしようか」

「うん、そうしようよ」

「怖いけれど」

「けれど若しかしたら」

「ドッグフードがあるかも知れないんだね」

「コロは自分の食べたいものを頭の中に思い浮かべて話します。」

「そう言うんだよね」

「そう、キャットフードがね」

「チビはチビでこちらです。」

「そう、あるかも知れないから」

「そうだね、わかったよ」

「ここでやっと頷いたコロでした。」

「それじゃあ」

「開けようか」

「うん。それでどうやって開けようか」

「コロが次に問題にするのはこのことでした。開けると決めてもです。問題はどうかやって開けるかです。それなのでした。」

第三章

「この箱を」

「とりあえず転がしてみよう？」

チビはこう言いました。

「そうしたら開くかも知れないよ」

「転がしてみるんだ」

「そうだよ。やってみよう？」

「そうだね。どうやって開くかわからないけれど」

コロもチビのその言葉に頷きました。

「そうしようか」

「うん、そうしよう」

こうしてまずは転がしてみることにしました。二匹は一緒に箱の一面に付いてです。それでそれぞれの前足で箱を押すのでした。

「それじゃあね」

「うん、それじゃあね」

まずは言葉を合わせてです。

「せい」

「それっ」

動きも合わせて押します。それで転がしました。

箱はコロコロと転がります。二匹はすぐにそれを追っかけます。

「さあ、開くかな」

「どうかな」

追っかけながら話をします。

「中に何かがあるかな」

「一体」

開けば中から何が出て来るのか、問題はそれでした。

それで追っかけます。そうして止まった箱に追いつきました。

その一面に付いてです。箱を見ます。

「開く？」

「それで」

実は転がっている時にあるボタンが床に触れています。それで。二匹が付いたその一面がです。いきなり開きました。そして。中からです。何かが飛び出してきました。

「うわっ!？」

「何これ!？」

何と黒髭の海賊がです。舌を出して飛び出してきたのです。バネがあつてそれで、です。二匹の前に飛び出してきたのです。

「お化け!！」

「違う、これ海賊だよ!！」

チビもコロも驚いています。

「で、出た!！」

「それでも出た!！」

そして慌てて部屋から飛び出してです。たまたま隣の部屋で積み木で遊んでいた男の子のところに飛んで来たのでした。

「あれっ、コロにチビ」

男の子はその二匹を見て言います。

「どうしたの? 一体」

「どうしたもこうしたも」

「海賊が出たんですよ!！」

コロとチビはこう男の子に対して訴えます。

「もう驚いたんですから」

「何なんですか、あれ」

「何を鳴いてるのかな」

けれど男の子には二匹の言葉はわかりません。犬と猫の言葉はです。人間である男の子にはわかる筈もないことなのです。

けれどです。男の子はその二匹を見て思いました。

「御飯が欲しいのかな」

それで来たと思ったのです。それで。

「わかったよ。それじゃあね」

そしてです。二匹の御飯とミルクをそれぞれ出します。そうして食べさせるのでした。

「たんとお食べ」

「そついうのじゃないんですけれどね」

「ですから海賊が」

二匹は自分達の御飯を出してきた男の子に対して言いました。けれどやっぱり男の子には二匹の言葉はわかりません。

「けれどまあ」

「いただきます」

それでも御飯は食べるのでした。そして食べ終わった時にはもう箱のことは忘れていました。あの部屋には箱がそのまま転がっています。海賊は舌を出してそのままいるのでした。

びっくりバコ 完

2010・9・3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6547o/>

びっくりバコ

2010年11月1日23時25分発行